

先代方丈黒田武志老師が発願し発刊された『成寿』も四十八巻を数えます。

檀信徒の皆さまに親しみを込め、解り易く仏教を説き続けた先代方丈さまの心を今一度追慕し『成寿』に掲載されたお話を再録させて頂きます。

先代方丈さまは、平成十四年八月三日、ドイツアイゼンブッフ・禅センター（大悲山普門寺）主催による『DOGEN 2002』高祖道元禪師七五〇回大遠忌記念ゼミナールに講師として招かれ「道元禪師からみた現代社会へのアプローチ 海外留学僧派遣の意義」と題した講演を行いました。五日にはミュンヘン郊外のニードーアルタイヒ修道院、七日にはデュッセルドルフのドイツ「恵光」日本文化センターで、デュッセルドルフ大学のベー前教授と共に、ドイツの皆さんと熱く論争を交わしました。

ドイツでの講演をおえて

黒田武志

八月初頭、ドイツ、アイゼンブッフ禅センター（大悲山普門寺）主催の「DOGEN 2002 高祖道元禅師七五〇回大遠忌記念ゼミナール」に招かれ講演する。のちパネルディスカッションで発言を求められ、西洋人が仏教に何を求めているのか、パネルを通じて痛感するところがあった。道元禅師の大遠忌円成も近い今、そのことを念頭に禅師さまに思い致しながらお話しさせていただいた。

私を招いてくれたドイツ大悲山普門寺は、一九九六年禅センターとして開所。その後本堂・別館が落成し、九八年大本山永平寺貫首宮崎奕保禅師を拝請開山とする允許を拝受。以来、毎年のように永平寺から役寮の御老師方が訪ねている。僧堂として九九年二月に第一回の安居を修され、同寺主監中川正壽老師（慶応大学哲学科出身）は、八〇年以來、当地でその摂心指導にあたっている。パネルディスカッションに

は中川老師とニードーアルタイヒ修道院元院長のユングクラウセン神父、そして私が参加した。中川老師が道元禅師の生涯と思想についてお話しし、私は『修証義』について述べた。

『正法眼蔵』の教えの中から短く分かり易い文章をもつて人間が仏として生きてゆく具体的なあり方、すなわち方法と目標とその意義を明らかに説いた仏教のエッセンスであり、まさしく仏教徒のバイブルだと説明し、時代を超え、全てを超えた、他の宗門に類のない経典であること、さらに時代がどんなに変化しようとも変わることはない人間としての美しい生き方が示されている大切な経典であることを強調した。

ドイツには既に独訳の『修証義』が刊行されている、多くの出席者の殆どがその『修証義』を読んでいるようだった。また、私が駒澤大学院を修行し、本山総持寺と永平寺で修行を重ね、全国托鉢行脚ののちには、タイ・インドへ

釈尊の足跡を尋ね、上座仏教に身を委ねる傍らキリスト教を中心とした西欧諸国を渡り歩いた行履を紹介、その行履の中から、僧侶としてのその存在と使命を実感したことを申し述べました。

一見穏やかな雰囲気の中で講演が続いたが、会場がパネルディスカッションに移されたとなん、雰囲気ガラリと一変し、出席者から唐突に質問があつた。何を訊かれるのかなと思つてみると、いきなり、『修証義』の第十七節を読み上げ、「一体何を言っているのか？」と問うてきた。因みに第十七節は、「諸仏の常に此中に住持たる、各各の方面に知覚を遺さず……」に始まり、「……其起す所の風水の利益に預る輩、皆甚妙不可思議の仏化に冥資せられて親き悟を顕わす、是を無為の功德とす、是を無作の功德とす、是れ発菩提心なり。」とあります。当然にして全てやりとりはドイツ語であり、私には日本女性のドイツ公認通訳士・川路由美さ

んが協力して下さった。この人は仏教にも造詣が深く、私の書いたものは全て読んで承知しており、この日に備えてくれていた素晴らしい通訳者だった。そのことの安心があつて、思うがままに話が出来ました。

まず私が申し上げたのは、「まさにこれがさとりのことなんです！」と。

この質問は、言葉の意味や解釈ではなく、本質の本質、その根源的な証悟である「さとり」そのことが何なのか、それを知りたいのだと感じたのです。今ここにドイツ人が求めているのは学問としての『修証義』ではない。実践の書としての『修証義』の世界を是非知りたいのだと直感したのです。さらに私は言葉を続けながら、

「ここに花があります」と私は指さした。

「人はこの花を美しいとか美しくないと思う。けれど花そのものは自分が美しいとか美しくな



いとか、そんなことは何も考えていません。人間であるわれわれが勝手にそう思うだけのことです。そう思うのはこの私の『おのれの心』なんです。昼に食べたカレーライスがうまかったと思うのは『おのれの心』がそう思うだけで、カレーライスはそんなことちつとも思わない。カレーライスとしてそこにあるだけなのです。美しい、美しくない、うまい、うまくないという人間の意識でそこにあるのではない。花そのものの姿、カレーライスそのものの姿。人間と何のかかわりもなくそこに存在している。その姿をありのままに見る、知ることが発菩提心であり、仏教に謂う『如実知見』、欲望や先入観や固定観念を捨てて見る心こそさとりであり人の喜ぶ心なんです」

と申し上げますと、ドイツ人はスッカリ安心して得心の笑顔を頂戴しました。

ややもすると禅の専門家は道元の生い立ちや

修行に終始し、生きてゆくうえでの実践につながるものか、さしを、受け手は感じていようか、に思えるのです。原理原則だけでは、全くといっていいほど西洋人には分からない。また専門家の方々が字句の説明を懇切丁寧に解読しても、彼らには全くといっていいほど分からない。分かるうともしない。ただ、「仏教って何なんだ?」「ざとりとは何だ?」。ということを実践を通し、現象の理を知りたい、知りたがっていると私は思っている。

多分、多くの日本人もそれと変わらないものを持っていてと思う。私の話は全て体験談、深くありません。しかし面白くもなく分かりもしない話に拍手を頂いたことは私を驚かすに充分だった。それだけに道元さまの偉大さをいままらながら感得しました。

「諸行無常」が釈尊の大原理の教え

拍手が止むともっと続けてくれというので、私は、インドのお釈迦さまが何を説かれたのか、出家前の釈尊が、お城にある四つの門を、四日にわたって違う門から出られた、あの話をした。これは生老病死つまり人間は生まれて老いてゆき、病気になって死んでゆく、このことを釈尊は深く捉え、世の中は全てに移り変わりがあり、諸行無常なのだということをおさとしになった。これが仏教の最も大切な、根本の教えであり、『修証義』の眼目だからこそ、その第一章に「生を明らめ死を明らむるは仏家一大事の因縁なり」と書かれてあるのだと説明したのです。私は、「生とは何ですか、死とは何ですか」と会場に訊いた。

誰も答えない。そこで私は「死も生も同じなんです」と。「今を精一杯生きたら、明日とか

何年先とかなんてないじゃありませんか」と。人間どんな生き方をしようとも結果は必ずついてくる。これが道理だったら人に喜ばれるように生きてゆこうじゃないか。もし、それでも悪を働いたら、そのときはどうするのか？ その人は懺悔をしましょう。懺悔滅罪は『修証義』の第二章である。以下第三章・受戒入位、四章・発願利生、五章・行持報恩までのさわりを話したのである。

話が終わると神父は「素晴らしい、よかった！よかった！」と行って下さった。神父はかつて安谷白雲老師に学んだ人でもある。翌朝、私と顔を合わせた時道元さまの教えは素晴らしいとまた感激を露にしたのである。

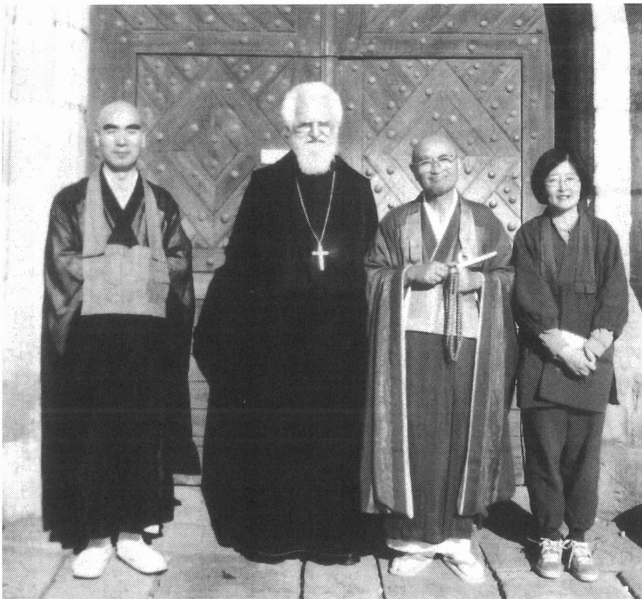
さて、われわれ曹洞宗の僧侶は、既に八百年前に道元禪師さまから素晴らしい教えを戴いていて、あとは『修証義』に書かれていることを限りなく実践することだ、と私は考えている。

七五〇回大遠忌に際して、私たちが自分に確認すべきことはこのことであり、ただ遠くを慮るだけではなく、そこに「道元さま居ますが如く」そのお心を頂き、理に従い「ただ実践する」。高祖さまからその促しを受けているのだと、心底それを知ることだと考える。ひるがえって曹洞宗の僧侶は何をするのかと問うと、只管打坐だという。しかし、現実には毎日坐禅をする住職は殆どいない、これが現実である。

高祖（道元禪師）さまの禅はひたすら悟りを求める人、一箇、半箇のための禅だったと私は思う。太祖（瑩山禪師）さまの禅は「檀信徒を神・仏と置いて」というお言葉に表れているように、あらゆる人を包み込む禅だった。そして、總持寺の二祖峨山禪師を先頭に、数多くの優れた弟子たちが草の根を分けて全国にちり、高祖・太祖の教えを自ら実践して、今日の曹洞宗を築かれた。つまり、やはり宗門にとっても

実践を旨とする人材の育成が、これまで以上に待たれているのである。

私は宗教法人横浜善光寺留学僧育英会を昭和五十九年に設立し、六十年第一回から海外留学僧を送り出し、六十三年（第三回）から外国僧を日本に受け入れている。既に十八回に及んでいるが、これは道元禅師の教えを正しく伝えることのできる国際的宗教者を育てなければならぬという、私の大誓願による。横浜の地に善光寺が立てられてから僅か十五年後に発足した横浜善光寺留学僧育英会事業である。周囲は無謀に過ぎるという声ばかりだったが、私の誓願を信じて支援していただいた檀信徒のお蔭で今日まで続けられた。これも道元禅師さまの御法恩によるものと、大遠忌に際して改めて御報謝申し上げるところである。



普門寺からのお便り

普門寺 中川 正壽師

本年は、普門寺からの出張としてミュンヘン市で展開しているドイツ語と日本語によるふたつの参禅会のほかに、バイエルン独日協会とミュンヘン日本人会の二つから問い合わせがあった、前者はこの普門寺で、後者はいつもの参禅会場で坐禅入門を兼ねたプログラムを組んでいます。その案内文を書くように言われ、考えるまでもなく直ぐにボールペンで「坐禅とは自分が自分になって、その自分もなくなつて安らぐことです」と書き付けました。この言葉を喜んで下さる方があって、私も喜んでいきます。

善光寺様御一同様のご発展を祈念申し上げます。
(二〇一七年十二月)

